宮崎県立看護大学研究紀要８（１）：１～12，2008

講　座

フロイトは何を遺したか
ーフロイトの復権（４）ー

布施　裕二

【キーワーズ】　夢解釈，顕在夢，潜在的夢内容，願望充足

第五章　夢解釈に関する説明

何故に人間の夢を研究するのかについて，フロイトは次のように述べる。

「正常の安定した状態にあっては，自我がエスと接する境界は抵抗（逆備給Gegenbesetzung）によって固定されて不動であり，また自我と超自我は両者が一致して働くために区別がつかなくなっている。このような状態は，いくら研究してもほとんど解明される余地がない。それ故われわれの研究を促進させてくれる唯一のものは，無意識なエスの内容が自我の中へ，意識へと侵入する可能性が生じた時，自我がこの侵入に対して新たに自己を防衛するという葛藤と動乱の状態である。（中略）ところで，そのような状態の代表は夜間の睡眠である。したがって，われわれが夢として認識する睡眠中の精神活動も，われわれにとって最も適切な研究対象である。」（173頁）

ここでは二つのことが言われている。一つは，正常の安定した状態では，精神についての研究は困難であるということであり，もう一つは，不安定な状態に置かれた精神のあり方こそが，研究の対象になるのであり，その代表が睡眠中に見る夢だということである。ここでも，精神を異常なあり方から見ていき，それを正常のあり方に適用しようとする，フロイトの究明方法が見られる。何故に，夢を重要視するようになったのか。彼の自伝の中で，次の様に言う。

「自由連想の操作とそれに付随する解釈法の助けによって精神分析は，ちょっと見たところでは実践上には有意義ではないようであるが，実際においては科学的な営みとしてまったく新しい立場と声望をもつにいたらなければならなかったある仕事に成功した。夢には意味があるのだということを証明し，その意味をよみとることができるようになったのである。」[1)]

ここで「自由連想」というのは，患者が頭の中に思い浮かべることを，「これは本題に関係ない」とか取捨選択せずに，そのまま治療者に話すことであり，精神分析療法で患者に求められる。治療者は，話されたことの意味を解釈していき，患者の無意識にある問題を探っていく。その治療の過程で，患者の話す夢の重要性が分かったというのである。

それは，神経症患者の夢の重要性ということである。しかし，その夢が語られるのは，神経症の治療場面においてであり，治療者との人間関係においてである。そのことも踏まえて，夢を見ていく必要がある。特に，神経症という病を持つ人の，身体や認識のあり方，人との関わり方を頭に置いてである。更にフロイトは次のように述べる。

Yuji Fuse：宮崎県立看護大学

「夢とは神経症の理解できない症状のようなもの，妄想とか強迫観念のようなものだとして取り扱い，その外見上の内容は見ないで，その個々の像を自由連想の対象となしたときに，われわれは一つの異なる成果に達したのであった。夢を見る人のたくさんの思いつきによって，われわれは，夢はもはや不合理であるとか錯乱しているなどといっては片づけられないような充分な価値のある心的作業に対応する思考形態であり，顕在的な夢はその姿がゆがめられ，短縮され，また誤解にみちた翻訳をされたものであり，それの視覚像への翻訳であるといいうるようなことについての知見をうることができたのである。」[2)]

ここで「顕在的な夢」と述べられているのは，実際に見る夢のことであり，それは潜在的にある心的なものの「姿がゆがめられ，短縮され，また誤解にみちた翻訳をされたもの」だと言うのである。これがフロイトの夢についての，基本的な捉え方である。

それは「夢とは何か」ということを，人間の認識のあり方から，一般的に捉え返したものではなく，あくまでフロイトの神経症者に対する治療経験により，フロイトなりに取り出したものである。その結果として，夢を「神経症の理解できない症状のようなもの，妄想とか強迫観念のようなもの」とした。精神の異常なあり方に似たものとしたのである。

とは言え，フロイトは「精神分析概説」で，次の様にも述べている。

「といってもこの事実は，われわれが正常な精神生活を病的状況に基づいて構成しているという，しばしば耳にする非難に該当しない。なぜならば，夢の性格がわれわれの覚醒生活といかに異なっているにせよ，夢は正常な人間の生活の中でも必ず現われる現象だからである。夢は，一般に知られているように，混乱していて，わけがわからず，まさに無意味なものである。夢の告げるところは現実に関するわれわれの一切の知識と矛盾している。そして夢を見ている間，われわれは夢の内容を客観的事実と認めることによって，精神病者のように振舞う。」（173～174頁）

ここでフロイトが述べているのは，夢というものが，正常な人間の生活で誰でも見るものであり，夢を見ている時は，精神病者のように振る舞うのであるから，神経症者の夢を取り上げることが，正常な精神生活を病的状況に基づいて構成しているとする非難は当たらない，ということである。

確かに夢は誰でも見るものである。場合によって夢にうなされ，外見上精神病のように見えないこともない。しかし，それはあくまで現象でしかない。その現象の似ていることを挙げても仕方がない。そこで大事なのは「夢とは」を，一般的に捉えていくことである。それは日中に見る「夢」（空想によるもの）との，区別と連関においてである。そして神経症と呼ばれる人の夢には，いかなる特徴があると言えるのか，精神病者という人は，いかなる夢を描いているのかと見ていく。

けれども，フロイトはそれらを区別することなく，夢は「誰でも見ている」「精神病者のように振る舞う」と，平面的につなげて見ているだけである。そしてそうするのにも理由がある。彼の「本能論」からすれば，正常な人間の精神と病的なそれとは，本能のあり方をうまくコントロール出来ているかどうかの違いであり，それほど大きなものと言えない。どちらも本能のあり方に支えられているという点では，同じだからである。夜見る夢も，本能によって生じるものであり，それを睡眠中にはコントロール出来ないことで，精神病者のようになるというのも，フロイトの立場では無理なくつながるのである。

フロイトがそのように夢を重要視するようになった経緯について，彼の「自伝」からもう少し見ていく。

「いまやわれわれは，一連の多くの問にたいして答えなければならないことになった。それらの問の中でもっとも重要なものは，夢の形成には動機があるかどうかということ，どのような条件の下でこの

夢の形成が完遂されるのか，いかなる道をとおって常にゆたかな意味をもった夢の思想が，意味のないこともしばしばある夢へと移行するようになるのか，などということである。1900年に公にした私の『夢判断』において，私はこれらの問のすべてに解釈を試みたのであった。ここには，この研究の抜粋をごく短くのせる余地しかない。それはこうである。夢の分析によって知りえたことは，潜在的な夢の思想を検討してみると，その中には，他の，すぐ了解でき，しかも夢みる人にもよく知られているものとは，きわだって区別される一つの夢の思想があるということであった。」[3)]

ここでは「常にゆたかな意味をもった夢の思想」が前提とされている。そこには，夢見る人にも内容がすぐ理解できるものと，そうでないものとがあるという。夢という精神の現象の背後に，「思想」という精神のあり方を置いているのが，フロイトの夢論の特徴と言える。これから，それを具体的に見ていくことにする。

上記の「夢判断」という著書の中では，夢分析の様々な例が挙げられている。その中でも比較的短く理解しやすいと思われるものを，ここに取り上げて検討してみる。「潜在的な夢の思想」というのは一体どういうものか，それを知るためにである。

「また別のひとりの婦人患者も（この患者は私が夢を主題にしつつ扱った患者たちの中ではもっとも頭がよかった）私の夢に関する見解に反対を表明した。だがこの反対論は，前の場合よりさらに手軽に，しかも，『ひとつの願望が叶えられないということは，別の願望が叶えられることを意味する』という図式に従って見事に解決された。

ある日，私はこの婦人患者に『夢は願望の充足だ』という説明をした。翌日彼女は私のところへやってきて，昨夜見た夢を話してくれた。姑と一緒に避暑地へ旅行するという夢である。彼女が夏のあいだを姑と一緒に過ごすことをひどくいやがっていて，いよいよどこかへ出かけようとする間際に，姑のいるところとはかなり離れた避暑先を借りることに成功して，そのいやな同居を免れえたことを私はよく承知していた。しかるに，この夢は彼女の願い通りになったこの解決を取り消しているのである。この夢こそは，夢は願望充足なりという私の見解をものの見事に反駁しているではないか。その通りである。」[4)]

まずここで見るべきは，フロイトが患者に対して，「夢は願望の充足だ」と説明していることである。それはフロイトがこれまでの経験から得た見方であろうが，それを患者の夢解釈の前提として，あらかじめ示している。すなわち，患者にとって先入見となることを提示した上で，患者の夢の話を聞いているし，それに基づいた夢解釈を行おうとしている。

また，患者から話された夢についても，フロイトはそれを事実かどうか疑うことなく，そのまま信じている。私達の経験からすると，夜に夢を見たとして，それを明確に覚えているのは，なかなか難しい。意識して覚えていようとしても，目が覚めて何かに気を取られたりすると，すぐに内容がぼやけてしまう。覚えていたとしても，断片的なことが多い。たまに強烈な内容の夢を見た時などは，よく覚えていることがあるが，「どうしてこんな夢を見たのだろう？」などと思っていると，いつの間にか夢の内容が薄れてしまっている。鮮明でないところは，「こうだったかな」と，自分の想像でつなぎ合わせることが多い。

それは夢の性質上仕方がないと言える。あくまで夢は睡眠中に内界に描かれる像であり，目が覚めて外界の反映を行うと，その像の方が強烈であり，夢は薄れてしまうしかない。けれどもこの神経症の婦人は，このように鮮明に夢を覚えていて，それを何の曇りも無く，フロイトに報告できるのである。さすがにフロイトが，「最も頭が良かった」と言うだけのことはある。その夢に対し，何の疑いを持つこともなく，フロイトは次のように夢を解く。

「ところでこの夢分析を行うには，夢のいっていることをさらにつきつめて行きさえすればいい。この夢のいおうとしたところは，『先生（フロイト）が間違っている』ということだった。つまり彼女の願いは，『あなたのおっしゃることは間違っています』ということにある。そしてこの願いを彼女の夢は彼女のために叶えてくれたのである。」[5)]

嫌な姑と一緒に過ごしたくないのに，姑と一緒に旅行する夢を見るというのは，「夢は願望の充足」というフロイトの夢の原則に反するが，フロイトに言わせると，それは「フロイトの言うことが間違いであって欲しい」という，患者の願望の充足だというのである。

「願望の充足」という一般的観点で言うのなら，ある事実について様々な見方が出来る。この夢の事実にしても，現実には仲の悪い姑だが，心の底では仲良くなりたいと願っているとも見て取れる。つまり，一緒に旅行できるような，仲の良い関係になりたいとである。あるいは，そのように自分が思う（行動する）ことで，誰かに（夫とか）褒められたいと思っているとかである。

けれども，フロイトがそういう解釈でなく，先の解釈をしたのは，患者とのそれまでの治療関係を踏まえてのものであろう。すなわちフロイトの治療上の解釈に対して，患者がまともに受け入れてこなかった，時にはそれを否定してきたという治療過程の存在である。つまり患者がフロイトの治療に対し，あまり素直な態度を示していないということである。その上に立つ「願望」という捉え方なのである。

そこからフロイトは，先のような解釈を行ったと思われるが，ここで不思議に思うのは，何故に患者は夢というかたちで，フロイトへの反発の思いを出したのかである。夢がフロイトの言うような内容であったとして，そのような夢として報告したとして，フロイトに対して，夢というかたちをとらないで，自分の反発する内界を，「先生のおっしゃることは違っています」と，示すことが出来ていたのであろうか。それが出来ていれば，このような夢という形をとって，自分の願望を示すことは必要ない。それが出来ていないとすると，そこにこそ，この患者の内界の問題があり，そこを治療的に変えていく必要がある。

フロイトは，先の夢について，更に解釈を進めていく。

「しかしながら，『あなたのいうことが間違っていますように』という願望，そして避暑というテーマをめぐって叶えられた願望は，実のところ，これとは全然別の，もっと厳粛な題材に関係しているのであった。

私はやはりそれと同じ頃に，彼女を分析してえられた材料からつぎのような推論を下していた。つまりこの患者のこれまでの生活のある時期に，患者の病因として重大な何事かが起こっていたに相違ないと推論していたのである。患者は，そんな記憶は全然ないといって，それを否定した。しかしやがてわれわれには，やはり私が正しかったことがわかった。私が間違っていてくれたらいいのだが，という彼女の望みは，姑と一緒に田舎へ出かけていく夢に姿を変じ，したがって，ちょうどその頃になってやっとおぼろげながら気のつきだした事どもが過去において実際には起こっていないものだったらいいのにという，正当な願望に相応していたのである。」[6)]

フロイトの解釈によると，彼女の見た夢は，フロイトの「夢は願望の充足」という原則に対する，単なる否定ではなく，以前フロイトが彼女に下した解釈を，否定したいという願望の現れであり，更には，その解釈の元となった生活上の事実を，否定したいという，彼女の願望の現れだというのである。

このように見ると，フロイトの夢解釈というのは，単に夢そのものをそれとして解釈するのではなく，その背後にある治療における事実や，患者の生活における事実を元にして，解釈しているということが分かる。夢というのも，治療の過程の中で検討され

るべきものとしてあり，あくまで患者の事実を踏まえて見るべきなのである。

そうすると，逆に夢そのものの解釈に，それほどの重みを置かなくてもいいのでは，と思えてくる。むしろ患者の生活の事実に目を向け，そこで生じた出来事のみならず，それによる患者の思いの変化，その思いをどのように整えようとしていったのか，という観点にこそ，治療の重点を置いた方が良いのではと思われる。

けれども，フロイトの治療態度，そして夢の解釈の利用は，そのようなものではない。あくまで患者の無意識にある患者の問題を，夢によって患者に意識させようとする手段である。患者の内界の問題を，夢などを用いて暴いていくことにこそ，治療の要が置かれている。そこでは，患者の苦痛な思いに配慮することもあまりない。

すなわち，もしも患者の過去に苦痛な体験があったとして，それが患者にとってどれだけ苦痛なものか，それを思い出すことがどれだけ大変で辛いことか，更にそれを他人の前で話すことがどれほど苦痛なことか，その思いに配慮することは見られない。それよりは，患者の過去の苦痛な出来事を想定して，その事実を認めるように迫っていく。

このようなフロイトの治療を受けている中で，患者から出される夢の話であり，その解釈であることに注意したい。先の夢が，確かにフロイトの言うように，彼の言葉を否定したい中身であったとして，そのような夢というかたちでしか，フロイトに向き合えない患者の認識のあり方にこそ，本当の治療上の問題があると言える。

すなわち夢というのは誰でも見るものであり，夢の中身には自分でも予想しない奇想天外なものも多く，自分で望む夢を見ようとしても，なかなか見られるものではない。その意味で，自分の責任の及ばないものである。そのようなものを介してしか，まともに自己主張出来ない内界のあり方こそが，神経症という病を成り立たせており，それが社会生活を送りにくくさせているということである。

フロイトにとっての「夢解釈」は，患者が内界の中に押し留めている，過去の苦痛な出来事を，明らかにするための一手段だと言える。フロイトの考えでは，夢の中では「抑圧」という精神機能が弱まり，比較的自分の願望が明らかになりやすいという。それについて「精神分析学概説」で，次のように述べている。

「最初に，夢の形成の誘因には二種類あることを確認しておくことが一番よい。つまり第一に，睡眠中，日常は抑圧されていた一定の本能興奮（無意識的願望）が自我の中に発現するだけの強度を得た場合，第二に覚醒生活から引き継がれて残存している傾向や前意識的思考過程がそれに属する一切の葛藤興奮とともに，睡眠中に無意識的要因による強化を受けた場合の二つである。」（174頁）

ここでは比較的意識しやすい「前意識」的なあり方と，なかなか意識しにくい「無意識」的なあり方とが，ともに夢の形成に関わっていると述べられている。先の患者の夢で言うならば，「嫌な姑と一緒に旅行するという夢」は，確かに「覚醒生活から引き継がれて残存している傾向」というものである。そういうことも，現実にありうるという意味においてである。患者はその夢を，「夢は願望の充足」というフロイトの言葉を，否定することに用いたが，フロイトはそれだけでなく，フロイトの解釈や過去の事実を否定したいという，患者の無意識的願望としたのである。

ここで生じているのは，夢の解釈をめぐっての，患者と治療者との対立である。患者が治療者の見方を受け入れたくないのに対し，治療者は患者に自分の見方を受け入れさせようとしている。患者の見た夢は，治療者にとって，自分の見方を患者に受け入れさせることに使われている。それにより患者の認識は，追いつめられているようにも見える。

この後，フロイトがどのように患者に働きかけ，患者がそれにどう応じていったかは，述べられてい

ないので，この夢が治療にどう役立ったのかは分からない。ただ，フロイトが治療に夢を使う仕方は，ここで理解できたように思える。実際，夢の解釈の仕方については，「精神分析概説」で次のように述べられている。

「顕在夢とその背後にある潜在内容の間の関係の複雑性，多義性に直面した場合，いったいどのような方法によればその一から多を導き出すことができるのか，そしてその際，顕在夢の中に出現する象徴の翻訳に助けを借り，幸運にもある方法を推定し得たということだけで安心してよいのか，などの疑問をわれわれが抱くのは当然である。

ほとんど大多数の例にあっては，この問題に満足な解決を見出すことができるが，ただしそれは，夢を見た当人が顕在内容のさまざまな要素に対して自分から提供する連想の助けをかりることによってである。この連想以外の方法はいかなるものでも恣意的なもので，確実性がない。」（176～177頁）

夢の解釈においては，患者から出される夢についての連想が，大きな役割を果たすというのである。それなしでは夢の解釈が，正しく行われないということである。先の患者の夢でも，そこからどのような患者の連想がなされるのかが，問題となっていくことになる。その夢から，フロイトの考えているような，患者が隠しておきたいと思っている事実の方に向かえば，フロイトの解釈が正しいことになるし，そうでなければまた別の夢を治療に使うことになる。

フロイトの夢解釈で有名な，「夢の象徴」ということにしても，患者の語る連想から見ていくというのである。その具体例を一つ，「夢判断」の中から見ていく。

「一，男子（性器）の象徴としての帽子（誘惑恐怖の結果，広場恐怖症に陥った若い婦人の夢の一部）。≪ 夏，私は表通りを散歩している。妙な格好の麦藁帽子を被っている。その帽子の中央部は上の方へふくれていて，両側の部分は下へ垂れ下がっている（陳述がここで渋りがちになる）。しかも，片方の側の方が，もう一方の側よりよけいに垂れ下がっている。気分は明るく，落ち着いている。若い士官の一隊とすれちがうが，『この人たちは私に手出しすることなんかできはしない』と考える。」[7)]

「誘惑恐怖」というのは，自分が他人（異性）から誘惑されるのではないかと恐れるものであり，その結果として，他人と出会う機会の多い，広いところに出るのが恐いという神経症（広場恐怖症）のあり方で，その婦人の見た夢の例である。その夢の中で興味深いのは，妙な形をした帽子を被った女性が，表通りを，気分も明るく落ち着いて歩いている，ということである。広場恐怖ということなら，とても出来ないような行動をとっている。つまり，暗い夢ではなく，明るい夢を報告している。これはどのような「無意識的願望」の現れなのか。フロイトは，その夢に対して，次のように対応する。

「患者は夢の中の帽子に対して何も思いつくことができない様子なので，私はこういってみた，『その真中の部分が，上の方へそそり立っていて，両わきが垂れ下がっている帽子は，おそらく男性性器でしょう』帽子が男だというのは奇妙に響くかもしれないが，世間では嫁に行くことを『帽子の下へはいる』ともいっている。帽子の両側が不均等に垂れ下がっているという細部こそは，夢判断に対しての絶好の手がかりを提供しているにちがいないのであるが，そこの部分の分析は故意に差し控えた。そして私は続けてこういった，『それはこういうことではありませんか，つまりもし自分がこういう見事な性器を持った男を夫にしているのなら，自分は士官たちに対して何の恐れることもない。すなわち，彼らからは何物も欲し望む必要はない。もしそうでなかったならば，あなたは元来あなたの誘惑空想のために，お供なしでは到底歩けはしなかった筈だから』彼女の恐怖について私はこんな工合の説明をもうそれま

でに幾度もいくども，別の材料を使ってやってきたのであった。」[8)]

このフロイトの解釈を分かりやすく述べるなら，患者の広場恐怖（誘惑恐怖）の原因は，夫の性器に対する不満であり，それゆえに自分が他の男性に誘惑されるのではないか（無意識ではそうされたいと願っていながら，それを自分に禁じている葛藤の存在）という恐れが生じ，外を一人で歩けないのだということであり，夢の中での様に見事な性器を持つ男を夫にしていれば，何も恐れることはないというのである。しかも，この様な見方は，これまでにも何度も別の材料を使って行ってきたという。

ここにはフロイトの本能論からする，病の前提というのがある。それはこれまで見てきた性的な本能が，神経症という病において大きな意味をもち，それをうまくコントロール出来ないことが，病の原因となるというものである。この患者の場合も，性的な本能に関わる問題が，広場恐怖（誘惑恐怖）の原因となっており，それは夫との性的な生活に問題があると捉えている。

そのフロイトからすると，夢の中に出てきた婦人の被る帽子は，男性性器の象徴となり，見事な夫のそれを頭に被ることにより，他の男性からの誘惑も恐くなくなり，明るい気持で街を歩ける。つまり広場恐怖がなくなるということになる。

それに対し，患者はどう応じたのか。

「ところで非常に興味深いのは，この夢解釈に対する患者の反応であった。彼女はさきほどの帽子の描写を撤回した。そして，両側が垂れ下がっているといった覚えはない，といいだした。しかし私はたしかにそうきいたので，自分のいったことを取り消そうとはしなかった。すると彼女はしばらく黙っていたが，やがて勇気を出して，私にこうたずねた，『わたしの夫の睾丸は，一方が他方よりも下がっているのですけれど，それはどういうことでしょうか。男のひとはみんなそうなっているのでしょうか』これであの帽子の奇妙な恰好は明らかに説明され，この夢判断の全体が彼女の承認するところとなった。この患者が上記の夢を報告してくれた頃には，私には帽子象徴のことはとうにわかっていたのである。」[9)]

患者が自分の与えた解釈を承認してくれたということで，フロイトはすごく満足そうである。しかしこの事実を見ると，フロイトが思うほど簡単なものかと思えてくる。そして，この解釈によって彼女の「広場恐怖症」は，快方に向かったのかどうか疑問に思えてくる。

彼女が勇気を奮ってフロイトに聞いてきたのは，夫の性器の特徴についての疑問である。それが普通なのかどうかということであり，そこに何らかの問題があると思っているからである。それを聞いたフロイトは，夢の中で帽子の恰好が奇妙なのは，そのせいかと納得しているだけで，患者が何故にそこに関心を持っているのかということに，何ら注意を払ってはいない。ただ「見事な性器を夫が持つ願望」と捉えている。しかし，それが彼女の願望を，果たして満足させるものであるかどうか。彼女の立場に立って，もう少し彼女の思いに目を向けたいものである。単に「本能の解決」を図るだけではなく。

確かにフロイトは，「この夢判断の全体が彼女の承認するところとなった」と述べている。けれども問題なのは，その「承認」の中身である。どのような意味で，その解釈を承認したのか。フロイトの言うように，「見事な性器を持った男を夫にしているなら」ということにしても，性器のあり方だけでその解釈を承認したのか，それとも人格的なものも含めて，それを承認したのか。つまり，「もっと男性らしい夫」とか，「他の人に誇れる夫」という意味で承認したのか，その中身が問題となるのだが，フロイトはそれ以上突っ込まない。

そして更に問題となるのは，「もし自分がこういう見事な性器を持った男を夫にしているのなら，自分は士官たちに対して何ら恐れることもない」と，フロイトが解釈している点である。すなわち，広場

恐怖の問題を，単に夫の性器の問題にしていて，それを彼女にも承認させたということである。それが果たして，彼女の神経症を改善に向かわせるのか。

と言うのも，広場恐怖をはじめとする神経症というのは，その人が円滑な社会生活を営んでいるならば，決して生じないものであり，たとえ夫との生活が問題になるにしても，それが夫の性器だけの問題なのかどうか，そこを検討する必要がある。すなわち，夫との関係の問題を，単なる身体的な問題のみならず，精神的な関わりの問題からも捉えていく必要があるし，その患者自身の精神面の問題（社会的な認識の発達とその展開）からも，幅広く見ていく必要がある。と言うのも，たとえ家庭内での夫の問題を抱えるにしても，家庭外での生活において，自分なりに社会的生活で満たされているならば，外に出ることを恐れる広場恐怖などには，到底なりにくいからである。

さて，患者の報告した夢の話に戻ると，何故患者がそのような夢を，フロイトに報告するようになったのか，それをフロイトの治療を受ける，患者の生活過程から見ていく。

先に挙げた「姑と旅行する夢」を報告した女性と異なるのは，フロイトの夢解釈を受け入れていることである。決して「先生（フロイト）は間違っている」と言わない。むしろその夢解釈を契機に，自分の疑問に思っている夫の性的なことについて，フロイトに尋ねたりしている。これはフロイトとの治療関係が，フロイトの望むように発展していることを意味する。フロイトの言うことを信じ，フロイトを頼っているかのようである。

治療者とのそのような関係があると，治療者との関係で自分の認識が安定していくと，患者の社会生活のあり方も，より安定したものとなる。社会生活上の不安や恐れも軽減されることになる。そしてこの病が，彼女自身に問題があるのではなく，夫（の性器）に問題があるとされ，それを繰り返し言われて信じることが出来れば，よけいに不安や恐れは軽減していくことになる。

この意味で，彼女の症状は軽減していると言えるし，より明るい夢を見ることも出来る。そういうことであれば，彼女の報告する夢の中の帽子は，彼女にとってのお守りのようなものであり，それを被っていれば安心するものである。フロイトの解釈では，それは夫の性器ということになるが，フロイトのそれだとしても別に問題はない。

けれども本当の問題は，彼女の現実の社会生活であり，彼女の置かれた社会的な状況で，彼女がどのような生活を送っていくかである。フロイトとの治療関係において精神が安定したとしても，解決すべき問題はそこにある。それをどう解決していくか。そこまでの視点を持つ必要があるのだが，「本能論」にはそれがない。

さて，先の夢の例で挙げた，「夢は願望の充足」ということであるが，「精神分析概説」では，次のように述べられている。

「形成されつつある夢は，それがエスから発したものの場合は本能満足を，また覚醒生活における前意識的活動の残滓から発するものの場合には，葛藤の解決，疑惑の排除，企図の実現を，無意識の助けをかりて自我に要求する。しかし眠っている自我は睡眠を確保しようとする願望に集中していて，これらの要求を障害と感じてこれを解決しようとする。自我はこのような状況のもとではなんら害にならないような願望充足をこれらの要求に対立させ，これらの要求を消去するという，一見譲歩のように見える行動をとることによってその解決に成功する。」（177頁）

ここでは睡眠中の「エス」と「自我」との対立と，夢による解決の仕方が説かれている。本能的欲求が満たされること，覚醒状態における葛藤を解決すること，疑惑を取り除いてくれること，行おうとすることの実現などが，無意識の助けを借りて自我に要求されるが，自我の方は眠りたいという願望があるので，それを妨げない限りでの解決を図ろうとする。それは自我にとって害のならない仕方で，それらの願望充足を図っていき，それが夢というかたちをと

るというのである。

すなわち，睡眠という状態においては，無意識や前意識（無意識の変化したもの）からの願望が自由になって，その実現を求めてくるのに対し，自我は睡眠願望を持続するため，前者の願望を夢というかたちで，それなりに叶えてやろうとするという。

そこに前提されているのは，睡眠の中では種々の欲望が実現を求めて動き出すということと，夜眠っている間でも，自我は休まず働いているということである。

フロイトは，例を挙げて次のように説く。

「この要求を願望充足によって置換することは，その後も引き続いて夢の仕事の本質的な働きとなる。おそらく，このことを三つの簡単な実例，空腹の夢，快適感の夢，および性的欲求の夢によって説明するのは余計なことではなかろう。

睡眠中に食物に対する欲求が生じると，われわれはすばらしい食事の夢を見て眠り続ける。いうまでもなく，目を醒して食事をとるか，睡眠を継続するかという選択もできたはずである。しかし，夢を見る当人は後者を選び，空腹を夢によって満足した。これは少なくとも一時的なものである。空腹がいつまでも続けば，彼はやはり目を醒さざるを得ない。」（177頁）

まず初めに，食べ物を求める願望の夢についてである。フロイトにとっては，眠っている間でも自我は働いており，自分の欲求を感じることができている。

けれども，睡眠というのは，脳細胞が身体の作り替えに専念して働いている状態であり，その際には，外界を反映して脳細胞に像を結ぶ活動を休ませている。それは，眠る前までに摂られた一日分の栄養によって，身体の細胞を新たな中身に作り替えているのであり，しっかり眠っている場合，そこにフロイトの言う「自我」の働く余地はない。

もちろん，その身体の作り替えの過程において，栄養物が使われることにより，身体に栄養の足りない状態が生じて，その身体としての内界のあり方が，脳細胞に影響を与え，内界としての認識に像を結ばせることもある。空腹に関わる内界の像であり，夢である。しかし，それは空腹という状態で，その人の脳細胞なりに描かれた像ではあっても，直接「食物に対する欲求」というほど，積極的なものとは限らない。

その空腹の状態で，フロイトの言うように，「すばらしい食事の夢を見る」とも限らない。お腹の空いた状態の自分を夢に見たり，何でもいいから食べたがっている自分を見たり，食べようとしたら，食べ物がなくなったという夢もある。つまり，そこで食欲が満たされている姿を，夢に見るとは限らないということである。

それゆえそこで，「目を醒して食事をとるか，睡眠を継続するかという選択」も生じない。というのも，眠っているからであり，身体の作り替えが継続しているからである。自分の意志で選択することではない。「空腹を夢によって満足」することもない。空腹の像を夢に見ているだけであり，そこに描かれる食べ物の像を見ているだけである。そして，身体の作り替えが一段落して，再び活動できる状態になり，脳細胞も外界の対象を，像として映し出すことができるようになると，目が覚めることになる。外の光や物音を像として描き，目が覚めていく。そこで「食べ物の夢を見たな。空腹だったのか」と思いながらであり，それもまたすぐに忘れていくものとなる。目が覚めれば，やるべきことは沢山あるから。もちろん，寝る前の身体が栄養不良状態で，空腹がひどすぎていれば，なかなか眠れない。眠ったとしても身体の作り替えもうまく行えず，早々と目が覚めることになる。食物供給が必要なためである。

「第二の実例では，睡眠者は決った時間に病院に行くために起床しなければならない。しかし，彼はさらに眠り続け，自分がすでに病院にいる夢を見るのである。しかしそれは患者としてであるので，起きる必要はないのである。」（同）

決まった時間に起きられないのは，起きる気持ちがあまりない（起きるのが嫌）ということもあるが，その基本の身体的あり方としては，身体の作り替えが十分に行われていないと言える。それが出来ていれば「嫌でも」目が覚めるからである。疲労蓄積があるのか，栄養摂取の問題があるのか，いずれにせよ脳細胞の外界を反映する働きが，未だ十分になされない（目が覚めない）状態にある。そこでいかなる夢を見ることになるのか。仕事で身体が疲れているなら，仕事に関わる夢を見ることもあろうし，食の摂取に問題があれば，食に関わる夢を見ることもある。けれども，職場の病院の夢を見ることはあったとして，自分が患者として眠っている夢とは限らない。仕事で怒られたりする嫌な夢もあろうし，あるいは遅刻して叱られる夢だってある。たとえ自分が患者として眠っている夢であったとしても，患者として病院で眠ることが（いくらそこで眠れたとして），果たしてその人にとって快になるのか。眠れれば，どこだっていいのか。そこまで身体が疲れているのか。

「あるいはまた，夜間に，禁止された性的対象，たとえば友人の妻についての享楽の願望が動く。すると，彼は性交の夢を見るが，もちろん友人の妻とのではなく，彼にとってはどうでもいいような別の女性との性交の夢なのであるが，それは友人の妻と同じ名前を持っている女性である。あるいは，この願望に対する彼自身の抵抗が，その愛人がいつでも匿名のまま現われる，という形で示されることもある。」（同）

性的な夢を見る例である。「禁止された性的対象」とあるが，それは現実の道徳的な社会関係においてであり，頭の中で思い描くことや，夢の中で見ることが禁止されているわけではない。もちろん道徳に厳しい人にとっては，頭の中で思い描くことすら許し難いとなるだろうが，それは一部の人である。まして夢の中でも思い描いてはいけないと，自分に厳しく迫る人は，更に一部の人であろう。大抵の人は，そういうことを頭の中に思い描いたりするし，たとえ夢の中にそれが出てきても，それほど気にすることもない。

そして眠っている間に「享楽の願望が動く」ということであるが，それもまた事実ではない。内界を作り替えている睡眠において，性的な面からの像の作りが行われ，それが性的な夢になったとしても，そこで「願望」というほど，積極的な認識が働くわけではない。そこで作られる性的な夢にしても，内界の性的な面からの像のつくりが行われる際，自分が日中思い描いている相手が，夢の像として描かれるとは限らない。それは自分で描こうとするものではなく，身体の作り替えを行っている脳細胞が，その時の内界のあり方（認識面・身体面）により，いわば勝手に偶然的に描くことになるゆえ，自分の思ってもいない相手，見も知らぬ相手がそこに出てくることだってあり，それを我々は「夢だから」と笑って済ますだけで，フロイトの言うような「抑圧」のことなどを考えることもない。

もちろん，自分が思い焦がれている人間が，夢の中に出てくるのは，内界としての像の強さが，そこに現れることもあるということで，それもまた不思議なことではない。身体の作り替えの最中でも，内界としての像の影響は残るからであり，そのままの形とは限らないが，夢となって現れる。同様に，自分が日中気にしていることが，その形を変えて夢に現れることもある。ここに「神経症者の夢」の分析の意味もあるのだが，本能からしか説かないフロイトにとっては，理解出来ないことである。

以上，フロイトの挙げた例とその説明は，眠っている時の認識（夢）を，欲求を満たすという観点から，絶対にこうなるはずという実例を挙げており，それが自分の「抑圧」の説明に合うようにであるのは明らかで，その基本にあるのは彼の「本能論」である。

本能論からすれば，眠っている時も「自我」は働いていることになり，本能などからの願望充足も何

とか工夫して満たすことになる。そしてそこで働く本能は主に性的な本能であり，覚醒時には満たせなかったものが，眠っている時に姿を変えて現れるということになる。そのように捉えるなら，全ての人間，全ての患者がそのような状態にあるのだから，その人の個別性に目を向けることは，それほど意味がないことになる。上記の代表的な夢の例も，皆に共通するものとして挙げることが出来る。

精神の病の治療の方向性は，本能に対する縛り＝抑圧を何とかすることであり，そのために夢解釈を役立てれば良く，ここでも相手の個別性や相手の思いなどに，それほど気を使うことはない。相手の本能の縛りを解くことが大事であり，それが相手の精神を楽にすると思うからである。夢解釈にしても，「夢は願望の充足である」と相手に迫り，相手が未だ打ち明けていない，あるいは認めようとしない性的な問題を，明らかにするために行うものである。

けれども，フロイトも夢解釈が簡単なものとは限らないとして，先の夢の実例に続けて，次のように言う。

「もちろん，すべての実例がこのように単純なわけではない。ことにまだ処理されていない昼間の残滓から起こり，睡眠中に無意識的な強化を受けたにすぎない夢では，無意識的な本能の力を発見し，その願望充足を指摘することがしばしば困難である。しかしわれわれは，夢のなかには常にそれが存在していると仮定することがゆるされるのである。」（178頁）

ここでフロイトは，夢解釈の困難なもの＝本能による願望充足を認めるのが難しいものとして，「昼間の残滓から起こり，睡眠中に無意識的な強化を受けたにすぎない夢」というものを挙げている。これは日中起きている時の，外界のあり方（自分に起こった出来事など）が，眠っている間の認識としての内界における夢の合成に，大きく関わっているものである。それだと，なかなか本能の願望充足の仕方が分からないと言うのである。

けれども，本来は，そのような現実の生活における認識のあり方（願望というものも含めて）が大事なのであり，そこでどのような像が頭の中で結ばれ，その像がどのように展開することで，その人の社会生活がどうなるのかを，検討していかねばならない。

しかるにフロイトは，そのような現実の社会生活や，そこでの認識のあり方を，より現実的に検討するよりは，本能というあり方を精神の根本的なものとして，それが精神にどのように現れるかを解釈することに主眼を置き，夢もそのための手段にするだけである。

フロイトの時代としては，対象としての精神に向き合い，それを何とか究明しようとした点では画期的であり，しかも単なる抽象論ではなく，患者の治療における事実を踏まえて見ていったことは，精神医学の歴史に残ることであるが，それが「本能論」という時代のくびきに囚われていたのが，何とも残念と言わざるを得ない。

引用・参考文献

1）J。Freud，懸田克躬訳：自己を語る（フロイト著作集４所収），人文書院，452，1979
2）3）前掲書，453
4）5）6）J。Freud，高橋義孝訳：夢判断（フロイト著作集１所収），人文書院，129，1981
7）前掲書，298
8）9）前掲書，299

Lecture

What academic achievement did Freud leave ?

—Restoration of Freudian Theory— (4)

Yuji Fuse

【Key words】 interpretation of dreams,manifest dreams,latent content,wish fulfillment

Yuji Fuse : Miyazaki Prefectural Nursing University